

松江市史講座・参考資料

於・松江市総合文化センター

平成25年8月17日（土）

民話「鉈盗られ物語」ほか

前・出雲かんべの里館長 酒井 董美^{ただよし}

 民話について（民話とは、神話、伝説。昔話、世間話をまとめた表現です）

【参考資料】民話について－「民間説話」を略したもので、次のような四種に分類されます。

- a) 神話＝八俣の大蛇・黄泉国・因幡の白ウサギ・国引き
- b) 昔話＝兎と亀のかけっこ・かちかち山・花咲爺・浦島太郎・天人の嫁さん・団子婿・和尚と小僧
- c) 伝説＝大雄寺の水飴幽霊・小豆研ぎ橋の怪・弁慶島・打吹山の天女
- d) 世間話＝キツネに化かされた話など

昔話 鉈盗られ物語（松江市美保関町七類）

語り手 森脇 キクさん（明治39年＝1906年生）

とんと昔があっただけな。
とんと隣の唐六左衛門が鉈を借りに行きたげな。
ついたちの日に行きたら、「ついもどいた」。
ふつかの日に行きたら、「不都合なことばかり言わさる」。
みつかの日に行きたら、「見たこたあにや（無い）」。
よっかに行きたら、「用のにや（無い）に何でござったか」。
いつかに行きたら、「いつのこと、疾うもどいた」。
むいかに行きたら、「無理なことばかり言わさる」。
なのかに行きたら、「何のことだか」。
ようかに行きたら、「よもよも（本当に）よう来たなあ」。
ここのかに行きたら、「ここにはにや（無い）」。
とうかに行きたら、とうとうもどさだった。
それで昔こっばり。

昭和45年（1970）7月26日収録

解説

この数え歌形式を持った昔話は、昭和45年7月26日にうかがったが、島根県教育委員会が中海周辺緊急民俗調査を行ったおり、私もその調査員としてわたしも参加していた。

不思議なことにこの日、同じ七類集落で作野ヨリさん（明治37年生）から、同類をうかがっている。それは次のものである。

とんと昔があっただけな。
とんと隣の唐六左衛門に鉈を貸せました。
いくら経っても返してくれんで。
ついたちに取おに行きたら、

「ついでに返した」って言って、
鼻はずいよかったって（相手にしてくれないで、の意）。
今度あ、ふつかに取おに行きたら、
「不都合なこと言え」てて言って、また追い返した。
みっかに取おに行きたら、
「見たこたあ無い」てってしまった。
よっかに取おに行きたら、「用はない」てった。
いつかに取おに行きたら、「いつのこと返した」て。
むいかに取おに行きたら、「無理なこと言え」てって。
なのかに取おに行きたら、「何のことだかい」てって、
また言った。
ようかに取おに行きたら、「焼けてしまった」てった。
ここのかに取おに行きたら、
「ここにはごんしえん」てってしまったて。
とうかに取おに行きたら、「疾う疾う返した」てってねえ。
そいで自分の鉈にしてしまったて。
そいで、昔こっぼり米の餅。

さて、こうして同じ日に仲間の話を聞きながら、その後はどうしたことか、いくら捜しても山陰両県では同類に出会うことはこれまでのところないのである。

それでは同類は、いったいどこで伝えられているのであろうか。実はこの話は、主として東北地方で語られていたものであるらしいのである。この話を最初に記録しているのは、江戸時代の旅行家で民俗学者であった菅江真澄(1754～1829)であった。三河出身の彼は、北海道・東北・信濃地方を旅行し、その見聞を遊覧記としてまとめている。そのうちの一つ、『はし

わのわか葉』の天明8年(1788)5月10日の日記に、問題の「鉈取られ物語」が次のように名前だけではあるが登場している。



【写真は七類港 筆者撮影】

……十日 寝坊して、日がたかくなってから起きた。きょうは、この江刺郡黒石の行道の家で人々と歌などをよんであそび、あす、胆沢郡の六日入（前沢町）に行こうなどと話していると、至急の用事だと、手紙を持った使いが来て、これをみた常雄は帰って行った。昨夜からここに盲法師たちが泊まっているので、それをよび出すと、南部閉伊郡の浦の人で、宮古（岩手県宮古市）の藤原というところの者だという。「さあ語れ」というと、紙張りの三弦をとりだし、声をはりあげて、「尼公物語」といって、佐藤庄司の家に弁慶、義経が偽山伏となって宿った浄瑠璃を語り、終わると小法師がでて、手をはたとうって、「さあ、ものがたりを語りましょう」と言う。「黄金砂まじりの山のいも、七駄片馬しちだんかたまずっしりどっさりとひきこんだるものがたり」 また「ごんが河原のこがねすな

猫の向面、さるのむかつら」「^{なた}鉦取られ物語」「しろこのもち、くろこのもち」などの早物語を語ってくれた。……

このように文章の後半の部分に、はっきりと「鉦取られ物語」の名が見えるのである。しかしながら、これは題のみを記したもので肝心の内容がどのようなものであったかという点については、残念ながら不明である。ところで、三谷栄一氏の書かれたものに、多分この正体であろうと考えられるものが紹介されているので引用しておく。

……また、「鉦とられ物語」というのも山形県庄内地方の「物語」にある。

一つ物語り候。隣の鈍左衛門へ鉦一丁貸したんの物語
三日目に取りに行ったらば そんだ鉦見たこともない。
四日目に取りに行ったらば 用もない鉦借りたことない。
五日目に取りに行ったらば 何時も鉦は借りたことない。
六日目に取りに行ったらば そんな無理な鉦借りたことない。
七日の日に取りに行ったらば 何んにもない鉦借りたことない。
八日の日に取りに行ったらば そんな^{やっ}埒も無い鉦借りたことない。
九日の日に取りに行ったらば そんな苦情な鉦借りたこともない。
十日の日に取りに行ったらば そんな鉦とんと借りたこともない。
となりの鈍左衛門に とうとう鉦を取られたんの物語。

というのが伝わっているが、おそらくこの物語であったかと想像される。……（「語り物」－『日本民俗学大系』第10巻 昭和34年 平凡社－）

三谷氏もまた早くからこのように指摘されているのである。ただ、この方には一日目と二日目の部分が脱落しているのが惜しまれるとはいえ、比較してみると一目瞭然、明らかに美保関町のものと同類であることが分かる。

さて、庄内地方のものは早物語として親しまれていた。先学の助けを借りて、簡単にこの早物語について説明しておく。

本来神事に関するカタリゴトから発達したもので、「てんぼ物語」とも言われ、早口で一気に語られる語りの意。昔話と元は同根であったと考えられる。そして、この語りものは室町時代には既に存在していたことが確認されており、正月にまず語られなければならなかった。語り手の多くは目の不自由な族芸人たちで、義太夫などとともこれを語っていたのであったという。（三谷栄一氏「語りもの」－同前書より意訳）

こうしてみると、早物語の本場ともいべき、庄内地方において、あくまでもこの「鉦取られ物語」は、早物語として語られていたと見るべきなのである。

一方、わたしの収録した美保関町の「鉦取られ物語」は、早物語ではなく昔話として語られていた。しかも、同じ地区で全く偶然に二人から同一の話を聞くことが出来たことは何を意味しているのだろうか。そして、今一つ、東北と山陰という遠く離れた二つの地域に同種類の話が存在している意味についても、やはり、考察しておかねばならないと思う。

七類地区で二人の方から同じ「鉦取られ物語」を聞いたのは、全く偶然なことではあった。しかも、それ以後いかに努力しても再びこの話は、他のところでは見つけることが出来ない。とは言え、同じ地区で同類の話が存在していたということは、重要な意味を示しているものと思う。つまり、昔はこの話が少なくともここ美保関町においても盛んに語られていたことを、これは証明しているとは言えないだろうか。なればこそ、このように互いに気づかず同種の話をも別な伝承者が語るという事実が認められるのであろう。

そこからさらに発展させ考察を進めてみると、この話は以前、なかなか人気のある話種として、当

地区近辺で語られていたものであろうと推察したい。

今一つここで問題にしたいのは、東北と山陰とこのように非常に離れた地域でありながら、なぜ、同一の話が存在しているのかということである。

推測の域を出ないが、大きな理由は美保関地区は庄内地方と同様、日本海側の漁村であるからではなかろうか。このことは日本海を媒介として、昔から陸路では困難な人々の交流が、案外容易だったと考えられるのである。

鎌倉時代に源を持つ物資交流の役を果たした回船は、封建性の強かった江戸時代でも北前船、西回り航路などと称されて盛んであり、両地区でもそのような交流が見られた模様で、これは陸路の交通からでは全く考えられなかったことといえるようである。そのような結果、東北地方で人気のあった「鉈取られ物語」が、ここ山陰の地にもたらされたと推測することは決して不自然ではないように思われる。

なお、この話が東北生まれであると考えられる点について、ここらで少し説明しておく。島根県のもをよく見ると、数え歌形式でリズムのある構成になっていることに気づく。そこからこの話は、単なる昔話というよりも、歌、あるいはそれに近い語り物といった性格を認めることが出来る。

すなわち、当地では早物語は発達していなかったのも、この語りを受容するには、あくまでも昔話としての形態にアレソジすることが必要だったのであろう。それが美保関町に残る語りとなったものと思われるのである。



昔 話

天人の嫁さん（松江市美保関町七類）

語り手 梅木 芳子キクさん（明治37年＝1904年生）

とんとん昔があったげな。炭焼きおやじさんが炭を焼いていたら、向こうをきれいなお姫さんが通りかかられたげな。それで、
一どうされるのだろうかーとおやじさんが見ていたら、お姫さんは美しい天の羽衣というものを堤の側の木の枝に引っかけておいて、水浴びをされるのだけな。それで炭焼きおやじさんは出来心で、その羽衣がほしくなり、羽衣を盗んで家へ帰ったげな。

お姫さんは水浴びが終わって羽衣を着ようと思われたけれどないので、
一山の向こうに煙が出ていたが、あの炭焼 きおやじの仕業かなーと思って、家へ訪ねて行かれたげな。

「ごめんくださいまし、暮れ暮れになっておじゃまに來ましたが、今日、水浴びに行っちゃったら、天の羽衣を失ってしまっ、おまえさんの目にとまって拾ってござっしゃたらあかと思っ、聞きに來ましたが」

「いや、そげなもんなんか、わしの用のないもんだ。拾いもせんが見てもおらん」

「ないて言われーもんならしかたがないが、ここには奥さんもないすこだけん、わしをここの嫁にしてござっしゃらんか」

「うーん、そげかね。ここは貧乏でおまえさんみたいなきれいな人に、かかになってござっしゃいなんで言っ、無理な話だと思っが」

「いんや、どげな貧乏なとこでもいいけん、どげぞおまえさんの嫁にしてござっしゃい」「そうが承知ならなっ、ござっしゃい」。お姫さんは嫁さんにしてもらったげな。

それから、炭焼きおやじさんは毎日毎日喜んで炭焼きに行っていたげな。月日の経つのは早いもので、三年も経つと赤ちゃんが生まれたのでテッパチと名をつけたげな。

テッパチがだいぶん大きくなって、羽衣を見つけたので、おやじさんが炭焼きに行った後、

「おかか、なんてて、きれいなもんがあった。出いてあぎょうか」

「うん、そげなら早やこと見しえてごしえ」

見ると例の羽衣だったげな。

「どこにこうが隠いてあった」

「あのね、自在鉤（じざいかぎ）の中にあっと思っっしゃい」

「ふーん、おかかは元々天の人間だども、こうがなて天へ上があことができで困っちゃっただ。これ

でおまえと一緒に天に上があだけん」と晩におやじさんの帰るのを待っていたげな。そして帰って来たら、

「今日はね、テッパチがおまえさんの留守に預かってごさっしやったもんを出いてごいたので、明日は天へ上がらと思うけん」

「ま、よもよも自分が隠いちょっただけん、しかたがない」。

「ほんなら、子どもも天へ連れて帰ええことだし、おまえさんも来たかったら、門へ朴（ほう）の木を植えておいてあげえけん、毎朝、上酒を一斗わて、七斗ついでごさっしやい。そんならこの朴の木が天に届くけん、この木に登って天へ上がらっしやいよ」

そう言い残すとお姫さんはテッパチを小脇に抱え天の羽衣をかけて、ひらりひらりと彼方の空へ上がって見えなくなれたげな。

おやじは炭焼きなどは手につかず、毎朝起きがけに、上酒をその朴の木の根元へついで六日まで続けたものの、早く天へ上がりたくなって、

「まあえわ、一斗つがんでて、天へ届いちょうだらぞ」と、朴の木に登りだしたげな。しかし、一斗足らなかつたために朴の木は天に届いていなかったげな。

「ああ、ほんに。かかはテッパチを連れて 上がっちゃうけん、あいつを呼んでみち やらかー」思っ

て、

「テッパチやあ、テッパチやあ」と呼んだら、テッパチがその声を聞きつけて、

「お父さんだ。早こと呼んであげんならん」と、天から長い布をぶらさげてあげて、

「こうにさばらっしやいよ」と引き上げてあげたげな。するとお姫さんも、

「ああ、おまえさん、よう上がらっしやった。お酒が足らで天へ届かだったに。まあ、ここで暮らさっしやあには、舅さんがどげな難しいことを言わっしやつても『やだ』てえことさえ言わっしやらな、ここにおられえし、『もういやだ』と言わっしやつたら、そのまま下へ降りてもらわにやいけません

がねえ」と言われたら、おやじさんも、

「ああ、ああ、それぐらいなことなら聞くけん」と約束して、その夜はすぎたげな。

それから朝、舅さんに向かって、

「あの、今日は何しましょうかね」

「向こうに粟畑がああけん、この八斗の種を八反の畑に粟蒔いてもどらっしやい」

「はいはい」。おやじはそこへ行って蒔きかけたけれど、二畝三畝蒔いたら、もう昼になったげな。

しかたがないと思っていたら、後からお姫さんが弁当を持ってきて、

「お父つつあん、来ましたで、おまえさん、この弁当食べてごさっしやい。そげすうとわしがテゴしちよいてあげえけん」と言う。おやじさんが弁当を食べて昼休みしている間に、神さんであるお姫さんは、すぐ八斗の粟を八反の畑に蒔いて帰って行ったげな。

それから、また次の日、

「今日は何しましょうか」

「今日のはう、昨日蒔かした種を一粒残らず八斗の枘に拾ってもどうだでや」

「はいはい」。

昼になると、またお姫さんが弁当を持って来て、おやじさんが食べているうちに、お姫さんがカンチクヨウチョウの笛という笛を取り出して吹かれたら、何千羽という鳥がどこからともなく飛んで来て、八斗の粟の種をちよいちよく、ちよいちよく、ちよいちよく、ちよいちよくと拾って取りまとめたげな。それでおやじさんはそれを袋に入れて負って帰ったげな。

次の日。

「今日のはう、家の下の方を渡った向こうに瓜や西瓜が植えてああけん、その西瓜や瓜の草を取ってごっさい」

「はいはい」

おやじさんが行ってみたら、とてもたくさんの瓜や西瓜が成っていたげな。お姫さんはおやじさんの出るときに、

「なんぼ瓜や西瓜が成っちゃうても、一つだし食うなよ」と言っておかれたのだけれども、あまりり

っぱに熟れているので、
一つぐらいむしって食っても分かあせん わいーと思って、味瓜を一つ、爪でブツンとむしって食べたら、さあ、食べるか食べないうちに大水になってしまい、後からお姫さんが弁当を持って来られたものの、川が渡られなくなつたので、お姫さんは、
「おまえさんが瓜食わっしゃったけん、もう逢われんがね、しかたがない。月の七日、七日に逢わやね」と言ったら、
「何だああ、川の音がして聞こえんがなあ。七月七日に逢わぞやあ」と、おやじさんが答えたげな。それで七夕さんは一年に一ぺん、七月七日にしか逢うことができぬようになったのだけな。
とんとん、そうでこっぼち。

昭和 45 年（1970）7 月 26 日収録

解 説 出雲地方に伝えられている「天人女房」の話である。この物語は有名で、室町時代前期に活躍した世阿彌（1363～1443）の作品である謡曲「羽衣」としても古くから知られており、日本人にとって懐かしい話である。ただ、この謡曲の方は昔話の前半部分が独立した形で作品化されている。簡単に述べておくと、三保の松原で漁夫白龍が天人の羽衣を取るが、天人の嘆きを見てやがてその衣を返す。天人は喜んで舞を舞い天に上って行くのである。したがって、二人の結婚云々以下の物語はない。

ところで、この物語の存在はさらに古く、大和朝廷が和銅 6 年（713 年）、諸国に命じて作らせた風土記の中にも認められる。例えば丹後の国では「比治の真奈井」の物語として知られているのである。概略を述べておこう。

丹波の郡役所の西北に比治の里（今の京都府中郡峰山町の久次、鱒留のあたり）にそびえている比治山（今の磯砂山）の頂上に泉があつて真奈井と呼ばれていた。そこに八人の天女が舞い降りてきて水浴をしていたが、里のワナサの翁^{おきな}と媼^{おみな}が山に登ってきてそれを見つけ、一人の天女の羽衣を隠してしまった。そのためその天女は衣装を返してもらう代わりに二人の願いを入れて、二人の子供になって十余年が過ぎていった。天女は酒を作ることが上手で、しかもその酒には天の霊薬がこめられているので、一杯飲むとどんな病気でも治るのだった。そのようなわけで老夫婦の家はたちまち豊かになり、土形^{ひじかた}（田畑）をたくさん持つようになった。この土地は土形の里と呼ばれるようになった。そうなる夫婦は今度はその娘が邪魔になりだし、とうとう天女を追い出してしまった。

彼女は天を仰いで嘆き、泣きながら家を出て行った。そしてある村に着いて、そこの人々に「あの二人の意地悪でむごい心を思えば、わたしの心も同じように、荒れた海の潮のように波立ち騒ぐばかりです」と言った。それ以来、この村は比治の里の荒塩の村（今の峰山町久次）と呼ばれるようになったという。それから天女はさらに、ある村に歩いて行き、槻^{つぎ}の木にもたれて哭き続けたので、ここを哭木の村（今の峰山町内記）というようになったのである。そして天女は竹野の郡の船木の里のある村にたどりついて、村人に対して「この村に来て、私の心はやっとなごやかになりました」と言って、ここに留まって住むようになった。それ以来、この村を奈具の村（今の竹野郡弥栄町船木のあたり）と呼ぶようになったという。この神が奈具の社に鎮まるトヨウカノメノミコトのことである、というのである。これは天人女房ではないが、それに非常に近い説話であるといえよう。

このほか、『近江国風土記』にも同類があるが省略する。

以上、眺めてきたように天人女房的羽衣説話は、古くからわが国で伝えられてきているのである。



戸籍を探る 関敬吾博士著『日本昔話大成』第11巻から

本格昔話（二 婚姻・異類女房）

118 天人女房（AT400）

1、漁夫（樵夫^{きこり}）が妻を得たいと神に祈願する。2、（a）神の教えによって、（b）助けた動物の援助によって、あるいは（c）偶然に池（川・湖・海辺）で天女（一人または数人）が水浴しているのを発見する。3、一人のは衣をうばい、家につれて帰って妻にする。4、一人または数人（三人）の子供が生まれる。5、天女は（a）自身で、（b）子供の暗示によって、（c）夫の不注意な口外によって、羽衣を発見する。6、それを着て天女は（a）単独で、または子供を連れて天に帰る。7、夫は天女が教えた方法によって、植物（竹・瓜^{うり}）を植え、それをつたって天にのぼる。8、（a）夫は天女の父が課した課題を果たして再び夫婦になる。または（b）失敗して夫婦になれない。



伝説

打吹山の由来（倉吉市西岩倉町越中町）

語り手 三朝町三朝 矢間 省三さん（大正8年＝1919年生）

倉吉の打吹山の由来ですけどなあ、まあ、昔、ある百姓… 百姓だったと思いますが、天女の衣を見て、脱いでるところを隠したわけなんですなあ。そいで隠したところが天女が帰れなくてそのままいついて、子どもが出来た。ところが、ある日、子どもが、

「これはお母さんの着物だ」って櫃（ひつ）を開けて見せただって。

「黙っとれ」って、父親に言われとっただけど。ところがその子どもが言ったんで、その母親が行って見たところが、自分の着ていた羽衣だったと。それで天に昇るのに羽衣を着て、朝顔の蔓に伝って天に上がってしまったって。ほいで子どもたちが二人嘆き悲しんで、鼓や太鼓を打ったり笛を吹いたりちゅうんで打吹山というような名前がその山についたってことがありました。夕顔だったか朝顔だったかはっきり覚えていないが賀茂神社に井戸があったんです。今あるかどうか分かんですけど、それを夕顔の井戸って、夕顔の井戸だったか朝顔の井戸だったかって名前がついていますがねえ。わしらの子どものときにあったのです。木組みがしてあった。

昭和63年（1988）8月19日収録

MEMO